共に開こう 新たな未来を
日韓国交正常化50周年

2015年
日韓国交正常化
50周年記念事業

ちょっといい話

～日韓間の草の根交流に関するエピソード集～

あなたは日本と韓国の間にある
このエピソードをご存じですか

海を越えてつながった強い絆の物語

まえがき

2015年は、1965年の日韓国交正常化から50周年となる記念すべき年です。

この間、日韓両国民の相互理解と交流の流れは着実に深化、拡大を続け、国交正常化当時には年間１万人であった両国間の人々の往来は、現在500万人を超えています。日本では「K-POP」や韓国ドラマが世代を問わず広く受け入れられ、韓国においても日本の漫画・アニメをはじめとする日本文化が人気を集めるようになりました。

一方で、そうした現代的なポップカルチャーに限らず、日韓の地域間においてはこれまで様々な分野を通じた交流が行われており、とりわけ草の根レベルでの交流では心温まるエピソードが数多く生まれています。

本冊子では、この50年の間に積み重ねられてきた心の交流に焦点を当てた「ちょっといい話」を皆様にご紹介いたします。

海峡を越えてお互いの心をつないできたものは何だったのでしょうか。ここでご紹介する10のエピソードからその一端を少しでも感じとっていただければ幸いです。

目次

まえがき …… 2

第1話（福島県）日韓の幸「福」の架け橋に！ …… 4

第2話（東京都）あなたを忘れない …… 6

第3話（埼玉県）高麗郡建郡1300年 …… 8

第4話（佐賀県）かちがらすの夢 …… 10

第5話（奈良県）示粋会が育んだもの …… 12

第6話（三重県）海女文化が紡ぐ新しい日韓交流 …… 14

第7話（宮城県）顔晴（がんば）ろう 宮農！ …… 16

第8話（鳥取県）輝かしい未来へ針路をとる鳥取県の日韓交流 …… 18

第9話（川崎市）私たちが花（ひとつ）になれる未来に向かって！ …… 20

第10話（高知県）韓国孤児の母になった日本人 田内千鶴子 …… 22

朝鮮通信使の歩み …… 24

日韓両外相によるメッセージ …… 26

あとがき …… 27

第1話 日韓の幸「福」の架け橋に！ 福島県

NPO法人 ふくかんねっと

「あはははは！いつもありがとね！」

福島の空に元気いっぱい明るい声を響かせるのは、韓国人女性の鄭玄実（チョン・ヒョンシル）さん。一児の母であり、日韓の相互理解と友好親善の発展のために交流活動を推進するNPO法人「ふくかんねっと」の理事長であり、東日本大震災や原発事故の被災地・福島のために「癒し」を提供する「FUKUKANいやしカフェ」のオーナーだ。全てに日々全力で走り抜く鄭さんの周りにはいつも笑いがたえない。

「大変なときこそ、楽しさを分かち合うことが大切。それが困難に打ち勝っていく力になるの」

鄭さんが来日したのは31年前の1984年。芥川龍之介へのあこがれがきっかけで東京の大学に留学した。卒業後は東京で大学講師として働き、2000年に家族の都合で福島市郊外の庭坂地区に移り住んだ。

ふくかんねっと理事長、いやしカフェオーナーの鄭さん

「庭坂に引っ越してきた頃は、その違いに驚きました。近所のお年寄りが子供を預かってくれたり、隣の家を訪ねると獲れたての野菜を両手いっぱいに持たせてくれたり。周囲の人の温かさが心に染みました。ここは幸『福』の『島』なんです」

当時韓国語教室を開いていた鄭さんが、近所の人の真心へのお返しに手作りキムチをお裾分けしたところ、これが大評判。キムチ作り講習会や韓国料理教室も度々開催するようになり、地域の人との距離もぐっと縮まった。

「言葉や料理を超えて、もっと日韓交流を広げていきたい！」との思いから2006年にはNPO法人ふくかんねっとを設立。日本と韓国の子どもたちの相互派遣交流や、伝統楽器演奏会など、持ち前のバイタリティーで草の根交流の輪を大きく広げてきた。

そんな最中のことだった。2011年3月、東日本大震災と原発事故が突如として福島をおそった。震災によって家を流され、家族を亡くし、うちひしがれる被災者に、いてもたってもいられなくなった鄭さんは、手作りの韓国料理で被災者を必死に励まし続けた。

「私にできるのは、被災した人を食事で癒すこと。食は全ての基本。料理で福島の人に元気になってもらいたいんです」

2012年11月には仲間とともに「FUKUKANいやしカフェ」を開店させた。ビビンバなどの代表的な韓国料理のほか、健康を考えた薬膳料理、形が不揃いで出荷できない地元農産物を使ったオリジナル「フルーツキムチ」はどれも絶品で、食べた人も、地域も、みんなを元気づけたいとの鄭さんの思いがあふれている。

凝縮された果物の甘みと唐辛子の辛さで食欲増進！カフェ人気No.1の干しリンゴのキムチ

2014年からは、韓国人に震災後の福島を正しく知ってもらうための「正しい福島を伝えようプロジェクト」を開始した。K-POPアーティストを招いて「福島復興ライブ」を開催し、帰国後は福島での体験を発信してもらうなど、福島の安全性を広く韓国の人に伝える草の根交流活動だ。

日韓国交正常化50周年に当たる2015年には、日韓文化交流基金で募集した「草の根青少交流事業実施団体」の一つとして同団体が選ばれ、8月には韓国全州（チョンジュ）から166名の青少年を福島に招待し、9月には福島の青少年80名が全州を訪問するという大型交流事業の架け橋を担った。

言葉も通じず、最初は顔を合わせるのも恥ずかしがっていた両国の子どもたち。日本といえば威圧的というイメージをもっていたと語る韓国の子も、直接ふれあう中で次第にその先入観が打ち破られていった。「みんな親切。日本のイメージが変わった」「言葉は通じなくても、心は通じることがわかった」。別れを惜しむ、強い絆で結ばれた友情を育んだ。

日韓交流イベントで肩を組み合う福島と全州の青年（2015年8月）

福島の放射能汚染による風評被害や韓国でのMERS（中東呼吸器症候群）の流行により一部、成功を疑問視する声もあったが、全ての逆境を乗り越えて収めた大成功に、鄭さんの思いもひとしおだ。

「韓国からの参加者を含め1,500人が一つになった様子を見て、心が熱くなりました。韓国の子どもたちが、帰国してから家族や友人に福島のありのままの姿を伝えてくれれば、これほど嬉しいことはありません」

「韓国を愛する福島の仲間たちと日韓友好のために汗を流し、喜びを分かち合いたい。私はふくかん（福韓）人。韓国人、福島人としての誇りを胸に、これからも頑張ります！」

第2話 あなたを忘れない 東京都

エルエスエイチアジア奨学会 会長 谷野 作太郎

今から15年前の2001年1月26日、JR新大久保の駅で線路に転落した日本人を救おうとして、二人の人がとっさに線路に飛び降り、しかし、突進してきた電車に轢かれて結局三人とも帰らぬ人に……という痛ましい出来事がありました。飛び降りた一人は関根史郎さんというカメラマン、もう一人は李秀賢（イ・スヒョン）君という韓国からの留学生で、李秀賢君は、ソウルの名門校高麗大学から、一念発起、日本語を習得するため日本に留学中の学生でした。

この出来事は、当時日本の新聞に大きく報じられ、二人の勇気ある行動は大きな感動を呼びました。そして、森総理（当時）も出席される中、立派な葬儀が営まれ、またお二人のもとには日韓の有志の方々から続々と弔慰金が寄せられました。しかし、李秀賢君のご両親は、これを受け取ることを辞退され、これを「自分たちの息子と同じく日本語を習得しようと日本でがんばっているアジアからの学生たちの勉学の一助に当ててほしい」とお申し出になりました。

その結果立ち上がったのがエルエスエイチ（LSH）アジア奨学会です。ちなみに、LSHは李秀賢（Lee Soo Hyun）君の姓名の頭文字をとったものです。同奨学会は、故李秀賢君の勇気ある行動を長く顕彰すると同時に、母国と日本の架け橋になろうと李君と同じ志を抱いて日本語学校に学ぶアジア諸国からの留学生を、経済面で支援すべく、奨学金事業を行うことを目的に李秀賢君の一周忌に当たる2002年1月26日に発足しました。その後、多方面からご支援を頂き、2015年度までに739名のアジア出身の日本語学校生に奨学金を渡すことが出来ました。毎年行われている李秀賢君の追悼の会と奨学金の授与式には、ご両親も必ず出席されています。

毎年行われている奨学金授与式。多くの留学生が日本で勉学に励む

李秀賢君のこの痛ましい義挙は、その後日本では様々な機会を通じて詩に詠まれ、歌となり、また映画（「あなたを忘れない」）となりました。2007年1月に行われた映画の試写会には、天皇・皇后両陛下がお出ましになり、映画のあと、李秀賢君の御両親と親しく御歓談されました。

ここでは、奨学会の行事で朗読され、歌い続けられている詩と歌の一例をご紹介します。

小山修一詩集
「韓国の星、李秀賢君に捧ぐ」（一部抜粋）

君は私にとって今なお
晴れやかな空であり
さわやかな風であり
心と心をつなぐ虹であり
烈々と燃える革命の灯だ

作詞・作曲　中村里美
「忘れないよ　いつまでも」（一部抜粋）

忘れないよ　いつまでも
大きな夢抱いてた君を
僕らは忘れないよ
留学先の見知らぬ命を救おうとして
天に召されて暗闇消し去る光となった

忘れないよ　いつまでも
大きな夢抱いてた君を
僕らは忘れないよ
君が僕らの心に残してくれたもの

両陛下と握手を交わす李秀賢さんのご両親（2007年1月）

“忘れないよ いつまでも”一李秀賢さんの遺志を受け継ぐ奨学会の集いにて

愛と、勇気と、優しさ、思いやり、国を超えて
君の国と僕の国の架け橋になりたいと
語っていた君の夢　忘れないよ　いつまでも

私どもの奨学会はお陰様で発足後14年が経ちます。我々の活動が草の根ボランティア活動のひとつとして、今後の日韓関係構築に寄与し、更にはアジア諸国の若者たちの日本語教育の面で少しでも貢献することが出来れば、これに勝る喜びはありません。

末尾となりましたが、李秀賢君の父君・李盛大氏は、長年にわたる日韓関係発展への功績が認められ、2015年6月、日本政府より旭日双光章を受勲されましたことを申し添えさせて頂きます。

第3話

高麗郡建郡1300年
～受け継がれる日韓友好の歴史～

埼玉県

高麗神社 第60代宮司 高麗 文康

埼玉県日高市は人口約5万7千人、自然が豊かで人心の穏やかな土地柄であり、東京から1時間余りで里山の雰囲気を味わうことができる行楽地としても知られている。古くから「高麗（こま）の里」と呼ばれ、駅名に「高麗駅」「高麗川駅」、河川に「高麗川」、寺社に「高麗山聖天院勝楽寺」や「高麗神社」、峠道に「高麗峠」と、「高麗」が溢れている。

地名に「高麗」が多い理由について、『続日本紀』霊亀２年（716年）の記事によると、当時の大和朝廷が朝鮮半島から来た高麗人（こまひと）1,799人を日高市周辺に遷して高麗郡を置いたことに由来しており、以来今日まで「高麗」の名が根付くことになった。

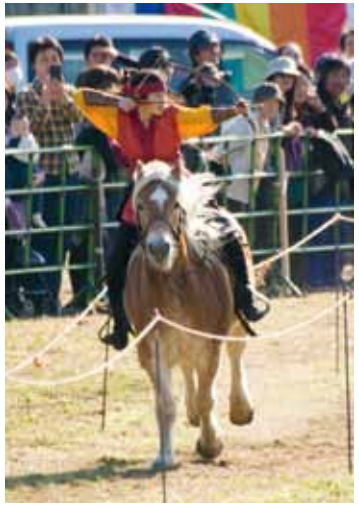
ここで言う高麗とは、古代朝鮮三国の一つ「高句麗」を意味する。666年、当時高句麗は長年にわたる唐との抗争などにより滅亡の危機を迎えていた。再起をかけて高句麗が日本に派遣したのが「玄武若光（げんぶじゃっこう）」ら使節団である。若光らは故国救済のため必死に努力したが、ほどなく高句麗は滅亡し、若光らはそのまま日本に土着することになった。高句麗滅亡から48年後、高麗郡が入間郡内（現在の埼玉県南部）の閑地に置かれ、大和朝廷から「従五位下」と「王（こきし）」の姓を賜った初代郡長・高麗王若光が誕生した。若光ら高麗人は武蔵国（現在の東京都と埼玉県）の開発に大きく貢献し、卒後は高麗神社に祀られ、その子孫が代々祀職を司った。高麗氏の系譜は筆者で60代目を数える。高麗の名は脈々と受け継がれる一方で、高麗郡は明治29年（1896年）に廃止され、その記憶は次第に人々の脳裏から欠落していった。

高句麗からの歴史を受け継ぐ高麗神社

時は流れて大正時代。初めて当社を訪れた朝鮮・慶尚北道儒林（キョンサンプクトユリム）観光団の申錫麟（シン・ソンニン）団長は「千年遺族此居郷（長い間、高句麗の末裔がこの場所にいた）」と高麗村（当時）を訪れた感慨をよみ、高麗殿山･興丸（おきまる･筆者の曽祖父）は「我有佳賓来自故国（私のところに故国から来た珍しい客がいる）」と歓迎した。当時日韓が複雑な関係にあったにもかかわらず、韓国との交流が、まるで旧友との再会を喜び合うが如く、互いへの敬慕から再び始まったことは高麗の里にとって誠に幸いなことであった。その後、当地には高麗の持つ歴史に共感する韓国からの客人が頻繁に訪れるようになり、日韓修交後は歴代の駐日韓国大使にもご参拝いただくなど、まさに高麗は日韓を結ぶ架け橋として今なお歴史を刻み続けている。

建郡1300年を目指して、約200人が高句麗衣装でパレード（2015年9月、日高市曼珠沙華まつりにて）

2016年には高麗郡建郡1300年の佳節を迎える。先人が築いてきた歴史や文化に感謝し、それを未来へつなぐ礎とするため、2002年から地域の人々の記憶に高麗郡をよみがえらせる啓発活動をスタートさせた。2015年４月には旧高麗郡と隣接する8市3町と手を取り合い、観光・文化・国際交流を中心とした地域の振興と活性化を目指した一般社団法人「高麗1300」が発足。歴史研究を通して先人の功績、産業、文化を知り、今再び地域を発展させていこうという取り組みを進めている。日高市も市長を委員長とする「高麗郡建郡1300年日高市実行委員会」を組織した。今後は行政と民間が一体となった取り組みが期待されている。日高市の友好都市烏山（オサン）市がある韓国・京畿道（キョンギド）などからも日高市の取り組みに対する期待の声が寄せられており、高麗郡建郡1300年は、その意義深い高麗の軌跡を辿り、日韓の新たな未来への門出を祝す、互いに喜びあえる祝祭となるだろう。



馬上から的を射る馬射戯（まさひ）。高句麗時代から行われ、流鏑馬（やぶさめ）のルーツに。日韓交流を基とした渡来文化を象徴するものとして現代によみがえった（2015年11月、日高市にて）

遠い昔、朝鮮半島を出自とした我々の先人たちが高麗郡を築き上げた。1300年の時を経た今、その歴史が東アジアへの平和と友好のメッセージになろうとは、さすがの高麗人たちも驚いているに違いない。

第4話 かちがらすの夢 佐賀県

NPO法人 **地球市民の会**

日本では佐賀平野を中心に生息するカササギ。「カチカチ」と鳴くことから佐賀県では「カチガラス」と呼ばれ、県鳥として広く親しまれています。韓国では「カチ(까치)」と呼ばれ、幸せを呼ぶ鳥とされてきました。日韓の未来に幸せがたくさん訪れるように、カチガラスは今日もその思いをのせ、大空に向けて翼を羽ばたかせます。

2007年4月のある朝、佐賀県に住む空手道5段の古賀武夫さんはカチガラスの鳴き声で目を覚ましました。いつも通り新聞を開くと、ある記事に目が釘付けになりました。

「佐賀で決まった人生」―なんと約20年前に古賀さんの家にホームステイをしていた韓国人・金萬真（キム・マンジン）さんへの取材記事でした。当時大学生の金さんにとって初めての海外体験となったホームステイ。それまでなんとなく日本語を勉強していたけれども、佐賀で子どもたちに韓国語を教えると

日韓友好に尽力された故古賀武夫さん（左から２人目）

みんな目を輝かせて聞いてくれたのでとても感動したこと、さらに日本語弁論大会や交流会で自国の伝統文化を紹介し、自慢し合ったりする中で、交流の大切さを痛感し、強烈な異文化体験となったことなどが語られていました。そして何よりこの経験が、「将来何をするか、ここで決まった」と言えるほどの原動力となり、20年経った今では韓国で観光交流を促進する政府系機関で活躍しているという内容でした。金さんの成長と活躍を知った古賀さんとご家族は大感動に包まれました。

金さんはその後同社で福岡支社長となり、古賀さんと再会を果たします。人と人、家族と家族、心と心のつきあいがいかに大切かを改めて実感した金さんは、現在名古屋支社長として、日韓の心を繋ぐためにこれまで以上に活躍されています。

古賀さんはこれまで長年にわたり日韓友好に尽力してきました。金さんが参加した日韓交流事業も、古賀さんを会長とするNPO法人「地球市民の会」が行ったものです。1980年代、日韓関係が今より良好ではなかった時代に両国の偏見と誤解を払拭するために立ち上げた市民交流プロジェクトであり、佐賀と韓国の空を飛ぶカチガラスに思いをのせて「かちがらす計画」と名付けました。

1988年に初めて韓国から39名の訪問団を迎え、参加者はホームステイやシンポジウムを通して多くの日本人と交流を行いました（金さんもこのとき日本を訪問しました）。2年目以降は参加者が100名を超え、4回目に行われた佐賀県肥前町でのシンポジウムでは「人と人、心と心の交流に国境はない」という肥前町宣言を行いました。多くの実績を残したかちがらす計画はその使命を達成したとして1994年で終了しましたが、この７年間で参加した韓国人は延べ900名、これほどの規模の交流実績は民間としては初めてのことで、戦後最大の日韓交流事業と称されるほど日韓友好に大きく寄与しました。

日韓の未来を真剣に考える両国の青年たち
（2010年、佐賀県の新かちがらす計画にて）

こうした取組の成果もあって徐々に民間交流は増えていきましたが、交流が盛んになるにつれて、新たに、日韓両国が抱える社会的問題には共通点が多いこともわかってました。そこで、将来を担う大学生が、単なる交流を超え、日韓がともに抱える問題について話し合うというプログラム「新かちがらす計画」を、2010年新たに開始したのです。

プログラムでは少子高齢化に伴う地域の過疎化に焦点を当て、日韓の大学生が実際に少子高齢化の進む佐賀県の山間地で町歩きを行い、住民にヒヤリングをしながらその地域のことを学んでいきました。韓国の大学生は、韓国の山間地でも同じ問題が起きていることに気付きます。一方、その地域で育まれた大自然や人の温かさに触れる中で、「町中にはない地域の良さを、日韓で一緒にPRしていきたい」などの課題解決に向けた真剣な語り合いが行われています。

古賀さんら地球市民の会が初めて行った日韓交流シンポジウム（1988年）

日韓は今や友好を築くだけではなく、ともに東アジアのリーダーとして、東アジアひいては地球規模の問題をともに解決していくパートナーになる時代になったわけです。日韓の未来のために大情熱を注いできた古賀さんは、2009年突然の病で道半ばにして遠くに旅立ちましたが、古賀さんの思いはカチガラスとともに海を越え、国境を越え、世代を超えて日韓の青年たちに受け継がれています。「かちがらす」の夢をかなえるために。

第5話 示粋会が育んだもの 奈良県

元示粋会会長夫人 **若原 万紗子**

奈良市と韓国の慶州（キョンジュ）市は、昭和45年4月に姉妹都市協定を結びました。行政主導によるものでしたが、県内で初めての海外の姉妹都市ということで市民の関心も高く、その後様々な市民団体が姉妹提携するなど、日韓交流の基礎となりました。

姉妹都市提携後しばらくしてから、奈良市内に民間奨学会である「示粋会（しすいかい）」が誕生しました。同奨学会は、当時奈良を訪れていた慶州文化高等学校のある教頭先生から「韓国では家庭の事情から学費を納められない学生が多い」との話を聞き、少しでも力になれればと、奈良ユネスコ協会のメンバーが中心となって設立したものです。

メンバーは、昭和40年代後半から約20年間にわたって、慶州で苦学する成績優秀な高校生に卒業まで必要となる額の奨学金を贈り続けました。

受給した学生の中には、その後医師や弁護士になった人もいました。

奨学金は、示粋会員が特定の学生に対して贈るのが原則でしたから、奨学生が結婚するときには、支援してきた会員が結婚式に招待されるといった心温まる出来事もありました。

また、長らく示粋会の会長を務めた夫の若原正善（故人）と私も、当時の慶州文化高等学校校長（故人）御一家と家族ぐるみのお付き合いをさせていただきました。私たちが初めて同校長の御自宅を訪問した際に、先方の奥様がわざわざ韓国宮廷料理の専門家を招いてもてなしてくださり、かつ私たちの日頃の奉仕活動への感謝のお言葉をいただき、大変感激したことを覚えています。

新羅千年の古都として、仏国寺（プルグクサ・写真）等をはじめとする貴重な歴史や文化が生きる慶州市

昭和50年代は、まだ韓国の高校生が来日するのは大変困難な時代でしたが、私たち示粋会は、奨学金を送っている韓国の高校生に何とか日本を体験させてあげたいと考えました。

その強い思いが韓国の要人を感動させ、10数名の高校生の来日が決定。慶州の高校生と示粋会のメンバーとの対面が実現したのでした。

奈良と慶州の絆はさらに強く！両市対抗の、ホッケー大会（2007年、左）と、国際少年サッカー大会（2015年、右）

その後平成2年に大阪で開催された「国際花と緑の博覧会」の際にも、同規模の高校生を招待しています。

こんなこともありました。

今から4～5年前のことでした。奈良女子大学に留学したことのある元・示粋会奨学生から私に電話があり、日本に漢字を伝えたとされる王仁（わに）博士の研究をしている韓国のグループの一員として、大阪府枚方市の長尾にある王仁博士のお墓へ行くことになったので、会いたいとのこと。是非にとお返事をした私は、当日皆が気持ちよくお墓参りができるように、先回りをしてお墓を清掃しながら一行を待ちました。清掃が終わった頃に1台のバスが到着。乗っていた一行から駆け寄ってきたその奨学生と再会を果たすことができました。奨学生は、この奨学会のお陰で今の自分があるということを一行に紹介し、それを聞いた韓国グループ全員が感動されたということがありました。

4世紀末、朝鮮半島から日本に漢字と儒教を伝えたとされる王仁の墓。韓国から修学旅行生が訪れるなど、日韓交流の拠点の一つとなっている

示粋会の奨学生は、その大半が日本語を独学で習得し、各界で活躍されていますが、示粋会のメンバーが慶州を訪問すると伝えると、いつも数名が集まってくれました。

韓国の経済発展に伴い、示粋会は平成5年に延べ168名の支援をもってその役割を終えましたが、歴代会長の故若原正善と浅川浩は姉妹都市交流に、そして私は夫をサポートしながら両国の女性団体の交流に貢献したとして、慶州市の名誉市民として顕彰していただき、光栄に思います。江戸時代の朝鮮外交に携わった雨森芳洲が「交隣提醒」で述べたように、日韓は善隣友好と誠心を旨とすべきであることを、少しではありますが、示粋会として行動で示すことができたのではないかと思います。今後も、日韓の青年がともに活躍していかれることを願ってやみません。

第6話 海女文化が紡ぐ新しい日韓交流 三重県

鳥羽市役所農水商工課水産係 宮本 益仁

2013年に放送されたNHK連続テレビ小説「あまちゃん」は、海に素潜りで入りアワビなどを採る海女の存在を広くアピールする良いきっかけになったと思います。

日本で海女が始まったのは2000年以上前からと言われ、万葉集にも海女の存在が確認できる言葉があります。また海女は海産物等を採取するのみならず、例えば伊勢神宮の伝統的神事（海産物の献上）や祭りに参加するなど、その漁と一体となった暮らしや信仰は次第に海女文化として発展していきました。

しかし近年、様々な環境変化による水産資源の減少、海女の高齢化に伴う後継者不足等の問題が浮上しています。日本全体の海女の数は約2,170名（2011年の民間調査）で、これは50年前の12％程度と言われており、海女の減少が如何に深刻かお判り頂けるかと思います。将来に向けた海女漁業の振興と海女文化の継承を進めていくため、鳥羽・志摩地域では「海女振興協議会」を設置し、対応に乗り出しました。

実はこの海女文化を持つ国は、世界でも日本と韓国の二カ国しかありません。日本と同様に素潜りで伝統的な海女漁が行なわれている韓国も、自然環境や海産物資源の保護・育成など、日本と共通する問題を抱えています。

三重県の鳥羽・志摩地域と、韓国で最も海女の多い済州（チェジュ）では、6～7年ほど前から、双方の研究者と海女を招き、日韓交互に交流会が行われてきました。これまで「海女シンポジウム」、「日本列島の海女さん大集合」、「海女サミット」、「海女祝祭」などを通じて、両国海女漁の課題はもちろん、文化・技術の違いや、歴史、地元で語り継がれる海の魔物談なども交わされてきたほか、両国の海女グループが地元の伝統ある海女歌や海女踊りを交互に披露し合うなど、大変意義深く、また感動的な交流を重ねてきました。

自然の恵みや厳しさを全身に受けて、2000年以上前から受け継がれてきた日本の海女漁（三重県）

海女踊りを披露する海女さんたち

海女文化交流会で日韓大学生が海女体験に参加（2015年、済州にて）

日韓の海女は双方とも極めてパワフルであり、それぞれ歌も踊りも全く異なるものの、ともに海を愛し、ともに自然の恵みの有難さとその怖さを全身で感じている同じ海女だからこそ、国を越えてわかりあえる深い心の繋がりがあるものと思いました。

これらがきっかけとなって、女性が地域のコミュニティの中心を担うという日韓の海女文化を、独自性があり価値のある地域文化として「世界無形文化遺産」に登録しようという取組みが始まりました。日韓国交正常化50周年の2015年11月に鳥羽市で開催された第6回海女サミットでもこれが話題に挙がりました。

済州の海女は、厳しい自然環境の中で耐え抜いてきているだけに生活力・精神力が強いと言われています。長年海に潜って貯めたお金で魚貝類専門の食堂を作り、おいしい店として有名となった模範的なある海女社長に対し、一番幸せを感じるのはどんな時かと尋ねると、「陸でお金が儲かることよりも、海に潜って無心になっている時が至福の時。この世に生きている限り海女は私の生甲斐よ」と力説していたのが印象深く残っています。

また、2015年夏には日韓国交正常化50周年記念事業として日韓大学生の海女文化交流を初めて実施し、双方の学生からは「海女文化の意義が初めて理解でき、保存継承の重要性を実感した」「日本の海女が明るく誇りを持って漁を行っている姿に感銘を受けた」「友達になるには、言葉ではなく、互いに歩み寄ろうとする努力が大事だと思った」「相手の見方が全く変わり、友情を深める有意義な交流会となった」等々の多くの肯定的な意見が聞かれました。これを契機に三重大学と済州大学では学術交流協定を締結するなど、今後に繋がる交流になったと思います。

海女文化を日韓合同でユネスコの世界無形文化遺産に登録することは容易ではないかもしれませんが、両国国民が世界で日本と韓国にしか存在しない貴重な海女文化を相互に保存し継承していく強い意志が何よりも大事です。そして一つの目標に向かって日韓が協力し合っていく姿勢とその過程が何よりも重要だと思います 。

第7話

顔晴ろう（がんば） 宮農！
～宮城県農業高校の復興と日韓交流～

宮城県

宮城県農業高等学校 教頭 **髙野 知行**

宮城県農業高等学校は1885年に創立された国内最古の農業高校です。

2011年3月11日に発生した東日本大震災の大津波により校舎１階部分が水没するなど、本校は壊滅的な被害を受けました。創立130年の歴史が一瞬にしてなくなってしまうのではないかと思われるほど壮絶なものでしたが、本校関係者や国内外からの多くの支援によって同年9月には仮設校舎が完成し、その歴史を絶やすことなく今に至っています。

寄贈された宮農復興太鼓を響かせる宮農和太鼓愛好会の生徒たち

とりわけ、韓国の有名な焼酎メーカーは、仙台市に東北支社があることから、飲料水を車に積んで長時間かけて支援に駆けつけてくれました。また、その過程で本校を含めた宮城県内の高校の窮状を知り、コメ乾燥調整機やフォークリフトなどの生徒の農業実習に不可欠な備品を寄贈してくださいました。生徒達は新しく入った新品の実習用機材に目を輝かせ、その喜びは失いかけていた希望を取り戻させてくれました。さらに、「宮農生を元気にしたい」、「地域に根ざした学校として仙台平野の農業振興の一翼を担うんだ」との思いから学校で和太鼓愛好会を立ち上げる際にも、同社から「将来ある子どもたちのために」と和太鼓10台を寄贈していただき、生徒たちを鼓舞する「宮農復興太鼓」の礎となりました。さらに、同社関係者は震災以降毎年欠かさず本校に足を運んで、生徒、教職員を励ましてくださり、その慈悲深い行動は生徒に大きな感銘を与えています。

韓国企業から寄贈されたコメ乾燥調整機（左）、フォークリフト（中）、ビニールハウス（右）

これをきっかけに韓国とのつながりが深まり、2014年4月16日には李丙琪（イ・ビョンギ）駐日大韓民国特命全権大使（当時）が本校を訪問されることになりました。その際、寄贈してくださった宮農復興太鼓の演奏や生徒の韓国語による挨拶で同大使を歓迎し、被災から復興へ向けた取り組みや仙台白菜商品化プロジェクトについて紹介したところ、同大使からは、震災で校舎が流され仮設校舎での教育を余儀なくされている私たち教職員、生徒全員に対して温かい激励の言葉が述べられるとともに、本校生徒5人を日韓青少年交流事業に招待してくださいました。駐仙台韓国総領事館との連携による仙台白菜Kimchi Festival（キムチフェスティバル）など、韓国との交流活動は今も続いています。

感謝を忘れず日々前進！
がんばろう 宮農！

今、本校は「顔（がん）晴（ば）ろう 宮農」のスローガンのもと、一人ひとりが復興に取り組んでいます。このような韓国からの物心両面にわたる温かい支援はほんの一例ですが、今後とも国内外からの多くの支援に感謝しつつ、生徒、教職員が一丸となって日韓交流と復興に向けた取り組みを進めていき、明るい未来に向かって邁進したいと思います。

駐日韓国大使から招待され宮城農業高校代表5人が参加した日韓青少年交流事業（2014年、韓国にて）

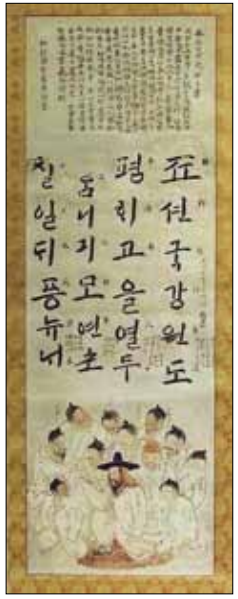
キムチフェスティバルのため自分たちで育てた白菜をキムチ漬けする生徒たち

第8話

輝かしい未来へ針路をとる 鳥取県の日韓交流

鳥取県観光交流局交流推進課長 小谷 章

日本が鎖国政策をとっていた1819年、鳥取県中部（現在の琴浦町）の八橋海岸に嵐のため朝鮮の商船が漂着しました。鳥取県には、当時の鳥取藩がこの商船の船員12名を手厚くもてなし、長崎まで送り届けたという史実があります。これは1991年に鳥取県立図書館で発見された掛軸「漂流朝鮮人之図」に描かれていた謝恩状から判明したものです。これを受けて鳥取県は、このエピソードを日韓交流のルーツと位置づけて当時の商船の船長・安義基（アン・ウィギ）氏の子孫探しに取り組み、実際に安氏一族の子孫を探し出したことは、日韓交流の礎を改めて確認できた重要な出来事となりました。約200年前に端を発するこの心温まる交流史は、日韓両国間の外交上の駆け引きや利害関係を超え、心を通わせる地域間交流の基礎として、現代の鳥取県の国際交流に息づいています。そして、商船が漂着した琴浦町には「日韓友好交流公園・風の丘」が整備され、四季折々の姿をみせる日本海を眺望しつつ、当時を偲ぶことができます。



1991年に鳥取県立図書館で発見された漂流朝鮮人之図

鳥取県は、近年、韓国をはじめとする対岸諸国との交流に力を入れてきました。特に、韓国北東部に位置する江原道（カンウォンド）とは1994年に友好提携を結び、文化、経済、観光、環境、青少年、教育など幅広い分野で交流を進め、2014年には友好交流20周年の節目を迎えました。遡ること10年、友好交流10周年の2004年には、両県道がその後の10年間に友好関係をますます発展させていくとの決意を込め、両県道の子どもたちが将来の自分や家族などに宛てたメッセージを入れたタイムカプセルを、江原道春川（チュンチョン）市に埋設しました。それから10年間の両県道の交流の歩みは「日韓地域間交流のモデル」と称されるまでに発展。友好交流20周年となった2014年にはタイムカプセルが掘り出され、メッセージ約千通が再び当時の子どもたちのもとに届けられ、皆がこれから切り開く未来への想いを新たにしました。

10年の時を経て開掘されたタイムカプセル（2014年、江原道春川市にて）

このように自治体レベルの草の根交流として、着実な歩みを続けてきた鳥取県と江原道の交流は、今や「北東アジア地域国際交流・協力地方政府サミット」というより大きな国際フレームに発展し、2015年は第20回を迎えるサミットが江原道で開催されました。両県道のほか、中国、ロシア、モンゴルの友好交流地域との強い絆も育まれ、日韓のみならず圏域の発展に寄与しています。また、市町村レベルでも環日本海拠点都市会議の開催が毎年の恒例行事として定着しています。韓国江原道の束草（ソクチョ）市、東海（トンヘ）市、鳥取県の米子市、境港市、鳥取市など日韓中露の都市が参加するこの国際会議は、2015年で第21回を数えています。

ソウル特別市と鳥取県との文化観光分野の交流も芽生え始めています。鳥取県が取り組んでいるまんが・アニメを活用した観光・産業振興に着目した同市は、2015年春、鳥取県境港市にある水木しげるロードなどを取材・視察しました。世界的に人気の高い漫画「ゲゲゲの鬼太郎」をまちづくりの共通テーマに据え、妖怪のブロンズ像が観光客を迎えるストリート、関連商品やサービスを提供する沿道の店舗など、まんが・アニメを活用した取り組みが大いに参考になったようです。その視察を契機にソウル市から鳥取県との業務連携が持ち掛けられ、「マンガを活かした地域づくりに関する業務連携協約」の締結に至りました。2015年秋にはソウル市で「鳥取×ソウル まんが王国inチェミロ」が開催され、ソウル市内の漫画通り・チェミロは今後水木しげるロードを参考に整備される予定です。

ソウル×鳥取まんが王国inチェミロのオープンを記念した式典（2015年10月、ソウル市にて）

冒頭で紹介した掛軸「漂流朝鮮人之図」が発見された鳥取県立図書館には、対岸諸国の諸資料を開架で公開している環日本海交流室があり、2015年に設立20周年を迎えました。鳥取県にとって2015年は、日韓国交正常化50周年のみならず、海を越えた地域間交流の節目の年となっています。草の根レベルでの日韓交流は、荒波に揉まれつつも、輝かしい未来を見据え、希望に満ちた交流の海を進航中です。

第9話 私たちが花（ひとつ）になれる未来に向かって！

川崎・富川高校生フォーラム・ハナ実行委員

1　裕子

私は裕子。かつて日本全国、朝鮮半島から多くの労働者が集った工業都市・川崎で生まれました。高校生のとき、先輩に誘われた多文化共生のお祭りで在日コリアンの存在を知り、関心を持つようになりました。

川崎には多くの在日コリアンが住む桜本という地域があります。「在日の人も多いし、韓国の商店街と姉妹縁組をしてはどうか」との商店街の発案で、1991年から富川（プチョン）市との商店街交流が始まりました。ちょうど韓国では自治体の国際交流に関心が高まっており、商店街交流から市民交流、市議会議員や市職員などの交流へと広がり、96年には両市の市長がお互いの市を訪問し友好都市協定を結びました。

「韓国の人と話してみたい」「友達になれるかな」。私は期待と不安に胸を膨らませ、2001年7月、富川で行われた高校生の日韓交流会に初めて参加しました。

そこで私は、韓国人の佑炫（ウヒョン）君に出会いました。

2　佑炫（ウヒョン）

僕は佑炫。富川で育ちました。もともと日本のマンガなどに関心があり、高校では「日本研究班」というサークルに入部しました。

ある日、先輩が富川市と日本の川崎市という都市が交流しているという新聞記事を偶然見つけてきました。「僕らも日本の高校生と交流したい」と富川市役所にお願いしたところ、2000年8月に川崎の2人の高校生が来韓。富川で第1回交流会を開くことができました。またその年の12月には川崎で第２回交流会を開き、たくさんの日本人や在日コリアンの友人ができました。

僕らはこの交流会のことを「ハナ交流会」と名付けました。「ハナ」とは韓国語で「ひとつ」という意味であり、違いを認め合いながら、韓国人も日本人も在日コリアンも「ひとつ」になって「花」を咲かせようという意味を込めたのです。

翌年、富川市役所から突然「今回は協力できないので交流会を中止してほしい」と連絡がありました。この年、日韓関係の悪化により交流事業が相次いで中止されており、ハナ交流会も開催が難しいと判断されたのです。

しかし、僕たち高校生は決してあきらめませんでした。「今こそ交流し、対話を続けるべきだ！」僕たちは必死に大人たちに訴えました。懸命に訴え続ける中で、ありがたいことに手弁当で通訳を引き受けてくれた人、バスを貸してくれた人、会場を貸してくれた人…応援してくれる人たちが次々と現れました。こうして2001年7月、ついに僕たちは自分たちの力でハナ第3回交流会を開くことができたのです。

ハナ第3回交流会に参加した裕子（1列目左から7人目）と佑炫（3列目左から3人目）（2001年）

そこで僕は、裕子さんという日本人に出会いました。

3　私たちが花（ひとつ）になれる未来に向けて

お互い大学に進学してからは会えなくなりました。佑炫は兵役に行き、裕子は日本と韓国の間にある歴史の重さを知るにつれ「自分の力では解決できない」という無力感でハナから距離を置くようになってしまったのです。

それから6年。「今、後輩たちはどんな風に交流しているのだろう」。ふと裕子が2007年12月のハナ第16回交流会に参加すると、そこにいたのは通訳として後輩を一生懸命サポートする佑炫でした。兵役後、日本の大学に留学し、活動を続けていたのです。6年前、「また会おうね！」と再会を約束したのに、私は避けてばかりいた…。そんな裕子の申し訳なさや無力感を打ち破ってくれたのは佑炫の言葉でした。「韓日の間には問題が山のようにあって、どれも韓国と日本が力を合わせないと解決できないものばかり。でも逆にいえば、韓国と日本が力を合わせればきっと解決できるさ」。「そうだ！だからこそこれからの時代をつくる若い世代の交流が大切なんだ！」裕子は再び佑炫と一緒に後輩達のサポートを始めました。

ハナ第31回交流会で後輩たちの通訳をする佑炫（右）

そして2015年5月、私たちは結婚しました。「国際交流にはこんな素敵な事が起こるんだ！」と皆に伝えたくて富川市に相談したところ、特別に市役所前の広場で式を挙げることができました。ハナの友人たちが手伝ってくれたおかげで素敵な手作り結婚式ができ、多くのハナの先輩・後輩たちが見守る中、川崎・富川両市の市長さんからお祝いの言葉もいただきました。

ハナは16年目を迎え、18期まで約300人が日韓をはじめグローバルに活動しています。「K-POPが好きで参加したけど、今では歴史も大好きです！」という後輩達の笑顔のために、今後もサポートを続けていこうと思います。私たちが花（ひとつ）になれる未来に向かって！

多くのハナのメンバーに祝福されながら結婚式を挙げた裕子と佑炫（2015年、富川市にて）

第10話 韓国孤児の母になった日本人 田内千鶴子

高知県

高知県文化生活部国際交流課

1995年、韓国で解禁第１号として公開された日本映画「愛の黙示録」。人々が日本人への絶対的な拒否感情を抱いていた20世紀初めの韓国の地で、飢えをしのぎ、日本人への憎悪を少しずつ溶かしながら、多くの韓国孤児を我が子のように守り育ててきた日本人・田内千鶴子（たうちちづこ）さんの怒濤の生涯を描いた実話です。

1919年、千鶴子さんが7歳の頃、朝鮮総督府官吏として任地に赴く父親とともに全羅南道（チョルラナムド）木浦（モッポ）市に移り住みました。24歳のとき、恩師のすすめで木浦共生園という孤児院を訪ねたことをきっかけに子どもたちの世話を始めます。共生園は空き地に小屋を建てただけの簡素な施設であり、キリスト教伝道師の尹致浩（ユン・チホ）さんが、橋の下で震えていた７人の孤児を育てるために一人始めたものでした。千鶴子さんは、ここで子どもたちに歌を教え、次第に心を通わせていきます。そして２年が経つ頃には尹致浩さんと結婚し、共生園の子どもたちの母となりました。

共生園の子どもたちに歌を教える千鶴子さん

韓国で身寄りのない子どもたちに愛を注ぎ続けた田内千鶴子さん

しかし当時は強い反日感情が渦巻いていた時代。日本人である千鶴子さんや、日本人を妻として迎えた尹致浩さんに憎悪の念を抱く人も決して少なくありませんでした。命の危険さえあったこの状況に鑑み、千鶴子さんはやむなく実子と母親を伴って帰郷します。

それでも韓国に残してきた子どもたちへの想いを断ち切れなかった彼女は、密航して木浦へ戻ります。帰ってきた千鶴子さんを子どもたちは唯一無二の母親として心から迎え入れ、共生園の活動に貢献するため、働きながら彼女を支えました。

そんな彼女に容赦なく試練が襲いかかります。朝鮮戦争の最中、千鶴子さんと尹致浩さんが人民裁判にかけらてしまったのです。二人とも命さえ奪われかねない状況でしたが、共生園で必死に、しかし相愛しながら生きる彼らの姿に心を動かされた村人たちに擁護され、なんとか生き延びることができました。

また共生園の食糧も尽きかけた頃、今度は夫が行方不明に。生活はさらに貧しさを極めました。夫のいない寂しさをぐっとこらえ、子どもたちの前では気丈に明るく振る舞いながら、皆を養うため朝から晩まで働きました。子どもたち一人ひとりを立派な人間に育てるため、教養を身につけさせることに心を砕くことも忘れませんでした。子どもたちに愛を注ぎ続け、病気で亡くなる最後の最後まで偉大な母として生き抜いたのです。

共生園の子どもたち（1933年頃）

1968年、千鶴子さんは56歳でこの世を去ります。30年余りの間で育てた孤児は3,000人以上にのぼります。日本人として初の大韓民国文化勲章国民賞が授与され、木浦市初となる市民葬では3万人もの人々が別れを惜しみ、当時の地元紙は「木浦が泣いた」とまで報道。国籍も貧しさも関係なく、人としてあるべき姿ですべての人を愛した千鶴子さんの崇高な人間愛は多くの人々の尊敬を集めました。

彼女の残した功績は、高知県と全羅南道にまたがる日韓友好の架け橋として今新たに受け継がれています。高知県は1997年の記念碑建立をきっかけに全羅南道と交流を重ね、2003年には両県道民の相互理解と友好関係の発展を目指す観光・文化交流協定を締結。さらに2009年には産業交流協定も結び、両県道の絆を確固たるものとしてきました。

そして近年は、これまで築いてきた関係をより良い未来に繋げるべく、若い世代の交流に取り組んでいます。この夏は高知市で開催された第24回全国高等学校漫画選手権大会「まんが甲子園」に全羅南道の高校生が参加し、日本中から集結した漫画家の卵たちとアイディアや画力を競い合いました。

まんが甲子園に参加した韓国の高校生。近年は文化を通じた日韓交流がますます盛んに（2015年、高知市にて）

韓国の学生たちは驚くほど日本の漫画やアニメに詳しく、そこから言葉や文化、習慣など、実に多くのことを学んでいます。「愛の黙示録」が韓国での日本映画解禁第１号であったことを思うと、今私たちがお互いの国の文化に当たり前のように触れられるのも、千鶴子さんが残してくれた財産のように感じられてなりません。

高知県と全羅南道、そして日本と韓国の友好と発展のため、これからも高知県は国際交流に取り組んでいきます。

朝鮮通信使の歩み

江戸時代の日本と朝鮮とは「通信の国」としての外交関係があり、朝鮮からは「朝鮮通信使」と呼ばれる国王の使者が日本に派遣されている。「通信」とは「信（よしみ）を通（かよ）わす」という意味であり、朝鮮通信使をめぐる交わりは、両国の信頼関係に基づいた平和と善隣友好を象徴しているといえる。徳川幕府はこの朝鮮通信使の来日を「将軍一代の盛儀」として重要視した。1607年から1811年までの約200年間に、朝鮮通信使は12回来日し、朝鮮国王の国書と徳川幕府の将軍の返書との交換が行われた。

朝鮮通信使は、正使・副使・従事官の三使以下、画員・医員・訳官・薬士など総勢400人から500人にのぼる大使節団であった。

まず朝鮮の都・漢城で国王の謁見を受けた後、釜山まで陸行。そこで6隻の通信使船に乗り、釜山から対馬に渡る。対馬からは対馬藩が朝鮮通信使に同行し、各所を経て、大阪へ。各寄港地では接待役大名の贅を尽くした饗応が行われた。

大阪で錨をおろした通信使は、帰国準備のため約100名を大阪に残し、喫水の浅い御楼船・川御座船に乗り換えて淀川を上っていく。これらは幕府・西国諸大名が提供した豪華絢爛な船であった。

淀から江戸まで、馬1,000頭近くを含めて2,000人前後の大行列で旅をする。京都に入ると、もとの祇園祭りの鉾巡行の道筋をなぞるように市中を通過した。草津からは将軍と朝鮮通信使のみが通行した「吉道」である朝鮮人街道に入り、摺針峠から美濃路を経て東海道に入っていった。

往復3,000kmに及ぶ旅の先々で、朝鮮通信使は、朝鮮の文化に憧れた多くの文人達と筆談・唱酬で交歓し、またその船団・行列は多くの民衆に熱狂的に迎えられるなど、日本の各階層の人々に多大な影響を与えた。日本各地の民族芸能や工芸品・民芸品にもその影響がうかがえるほか、朝鮮通信使が描いた絵画、したためた墨跡が、現在でも多数残され、往時の交流を彷彿とさせてくれる。

1965年に日韓基本条約が締結され、日本と大韓民国の国交が回復してから50年。今この時に、朝鮮通信使を見直すことは大きな意義がある。善隣友好の歴史から学び、文化・芸術から政治・経済まで、あらゆる分野で信を通わす「現代の通信使」が互いに行き交い、さらに両国国民間の友好親善・相互理解が深まっていくことを期待してやまない。

地図で見る朝鮮通信使の足跡 ～漢城（ハンソン）から江戸まで往復3,000kmの道のり～

ご挨拶 ～未来志向の日韓新時代にむけて～

日韓国交正常化50周年を迎え、この50年間の日韓両国間の交流を振り返ると、国交正常化当時と比べ、日韓両国民間の相互理解と交流は飛躍的に深化しました。国交正常化当時、年間1万人だった両国間の人の往来は，現在では1日1万人以上、年間500万人にまで増え、様々な分野における交流が活発化しています。本年、日韓の民間レベルで行われた「日韓国交正常化50周年認定事業」についても、440件を超える事業が認定されており、実に多岐に渡る交流が行われていることが分かります。

日韓両国は隣国であるだけに、その交流の歴史は古く、日本各地で韓国との間の交流の話が残っています。今回、ご紹介させて頂いた「ちょっといい話」はこれら多くの交流を通して生まれた逸話のほんの一部に過ぎませんが、どれもこれまで日韓間で育んできた強い絆を改めて私たちに物語るものです。12月の日韓合意が未来志向の新時代を切り開く端緒となり、こうした日本各地にある日韓の草の根交流が、日韓の明るい未来をより確かなものとする一助となることを期待しています。

平成27年12月　外務大臣 **岸田文雄**

ご挨拶

1965年の国交正常化以来、この半世紀の間、韓国と日本は近い隣国として政治や経済、社会、文化などのあらゆる分野において幅広い交流を通じ、関係を増進してきました。特に、今年は国交正常化50周年を迎え、韓日両国は『共に開こう、新たな未来を』という共通のスローガンの下、両国国民間の相互理解と友情を深める約440件余りの多彩な行事を開催しました。

何よりも2015年は、韓日両国が難しい懸案を対話と交渉を通じひとつずつ解いていくことで、これから韓・日関係が信頼に基づき好循環を生む形で発展していくための重要な土台を設けた一年であり、12月28日に行われた私と岸田外務大臣との会談の中で慰安婦問題を成功裏に妥結したことは、それを端的に反映しているといえます。

このような点から大変大きな意味を持つ今年を締めくくる事業の一環として発刊される「ちょっといい話」は、日本各地から寄せられた両国間の交流に関する心温まる話を載せています。本冊子では、ここ50年間、両国国民が心と心を繋ぐ美しい物語を数え切れないほどたくさん作られてきたことを語っています。

韓日間の友好関係を発展させていくことは、両国国民に与えられた使命であると思います。両国国民がお互いに対する理解と信頼を積み重ねながら、韓日両国のより希望に満ちた明るい未来を切り開く上で、この冊子が小さな足掛かりになることを願っております。

平成27年12月　外交部長官 **尹炳世**

あとがき

本冊子に掲載した草の根交流のエピソードは、全国47の都道府県と20の政令指定都市に募集を行って寄せられた事例のうちの、ほんの一部をご紹介したものです。ご紹介できなかったものも含め、いずれのエピソードも、日本全国津々浦々で一人ひとりが自分のできる精一杯を積み重ねた、光り輝く日韓友好の軌跡を示しています。

こうしたエピソードのように、両国の友情を育む人が一人また一人と多くなり、それぞれが「友好の架け橋」となって何百万、何千万と幾重にも広がっていくならば、両国の絆はますます強く、深くなっていくに違いありません。私たち一人ひとりこそ、日韓友好の架け橋であり、日韓友好を築く主役なのです。

本企画が、読者の皆様にとって日韓友好へ一歩を踏み出す一助となれば、これに勝る喜びはありません。今後ともこうした心温まるエピソードがあれば、引き続きご紹介していきたいと思います。

本冊子を作製した公益財団法人日韓文化交流基金は、韓国との間で青少年交流事業、学術交流事業など各種の事業を実施しております。関心をお持ちの方は、ぜひ同基金のホームページ（http://www.jkcf.or.jp）をご参照いただければ幸いです。